

認知症の人が体験する世界

こころの科学 161号 22012 1月 28-32p

長野県看護大学

阿保順子

はじめに

夢うつつという言葉がある。認知症が進行していく過程では、人は必ずや夢とうつつの混在という事態を経験する。認知症の人々は、その障害のプロセス、特に中等度から重度の障害へと進む過程において、自他の境界、言葉の境界、そして時間の境界が行き交う場所で、いわば、虚構と現実がないまぜになる時空で生きる。その世界は、なかなか他者からは理解されない。孤独や孤立は必須である。しかし、そこを突き抜けた時に、人間はこれまでの自らの生を賭けていると思えるような見事な世界を創造する。虚構ではあれ、彼らはさまざまな関係を設定して生きる。そして多くの他者とかかわり、意味を伴わない言葉であれ会話を楽しんで生きる。さらに、一見不可思議に見える行動を繰り返しながらも、他者と出会い、感動を手にしながら生きている。と私には思える。

本稿では、中等度から重度の認知症の人々が集まっている場所で観察してきた事象から、彼らの体験世界に迫りたい。

<夢とうつつが交錯する場所>

まずは重度に至る前の段階での、かなりせつなく、辛いと考えられる彼らの体験について紹介しよう。

1) 自他の境界—認知症の人々が行っている防衛の形

人間にとって、何かから身を守ることはすなわち防衛である。アルツハイマー型認知症の88歳の女性アキさんは、心臓の手術後しばらくしてから夫を亡くする。その後から、見当識障害などの症状がはじめ、2年前に認知症の専門病棟に入院する。

入院直後から帰宅欲求が強く、エレベーターで家に帰ろうとしたり、スタッフに対して攻撃的であり「どろぼう・人殺し」などの被害妄想もあった。それ以後、肺炎や心不全、転倒など身体状況の悪化にみまわれる。アキさんはしだいに切迫感に駆られるように車椅子で移動するようになる。スタッフに指示して病棟の廊下や他の患者さんの病室に入る、エレベーターで1階まで降りては上がるということをくり返す。その際のアキさんは、タオルを一枚は首に巻き、もう一枚は頭にほっかむり様に巻くという出で立ちである。さらに、自分のベッドに上がる場合でも靴を決して脱がないし、ベッドに横になるとタオルケットを顔にまでかけてしまう。そして「殺される」を連発し、食事も摂ろうとしない。

アキさんが、入院時点での認知の軽い障害から居場所のなさを感じていたことは確かであろう。また彼女はもともと右耳の難聴があった。それに加え、身体状況の悪化から認知の歪みは加速され、居場所のなさが見知らぬ恐ろしい世界へと変貌していったと考えられる。むろん、切迫感を伴う車椅子での移動は恐ろしさからの逃亡を意味しているだろうし、タオルのほっかむりや靴を脱がないでベッドに上がる行為、そしてタオルケットを顔までかけるという行為は、油断できない見知らぬ世界から身を守るための文字通りの防衛であろう。食事は下手に食べれば毒が入っているかもしれないし、それもまた文字通り「殺される」ことを意味するだろう。

これらのことを防衛の理由の観点から考えれば、それは、自分が周囲世界にスポイルされてしまう危機感があるということになる。単なる見知らぬ世界に居ることを超えて、環界から侵入されてくる恐怖がそこにはある。アキさんの防衛は、その意味で、周囲世界が

自他の境界をこじあけて自らの内側に勝手に入り込んでくることの脅威、つまり自他の境界の不鮮明さゆえに生じているように考えることができる。

2) 言葉の境界—外在化されている言語から内言語へ

スミさんは90歳になる女性の患者さんで、やはりアルツハイマー型認知症と診断されている。スミさんは、3年前から認知症の専門病棟に入院していたが、大腿骨転子骨折にて他の病院で治療している。この骨折を境にして、スミさんの状態は変化する。

骨折前は、ある意味高度な会話が可能であった。たとえば、「外に出てみましょう」とスタッフに提案するが、現実には、ここの場所から外に出られないことをスミさんはどこかで承知している。しかし一旦提案した以上、自らそれを取り下げることができない。そこでスミさんは、スタッフへの気配りを見せながら、ひそかに病棟に帰る方向に話を誘導していくのである。彼女はまた話を作るのがうまい。彼女の作話は、過去の苦い体験が、その場面で視覚に飛び込んできた事柄と組み合わせられることによって成立しており、一定の筋はある。換言すれば内容に意味を感じ取ることができるものである。しかし、骨折以降、彼女の作話は、この脈絡が欠如し、内容に意味を見いだすことが困難になっていく。最初は、偶然居合わせた隣の患者さんからお金を借りていると話すが、たまたまナースステーションのカウンターの上に置いてあった印鑑を見て「人にはお金を貸してもいいけど、印鑑は押さないとだめなのよ」と脈絡が切れてしまう。また、スミさんが手で首から背中にかけて触っているのでスタッフが「かゆいんですか？」と尋ねると「ええ、お金がないからかゆくなるの」という。文章の組み合わせがにわかには了解できなくなってくる。外在化される言語はあるのだが、それでもって他者とやりとりすることが難しくなっていく。

人間は複雑なことを考える時にはよく紙に書くが、声に出すことも同様な働きがある。人は、自分の思考の中だけで処理できない事柄を、まず「内語」にし、次の段階で口に出すことによって外在化する。スミさんの変化は、他者とのやりとりが内容的に成立していた段階から、やりとりはしていても内容が失われる段階、つまり形骸化した会話へと向かっている。この先、言葉を外在化できなくなり、内語に留まっている状態へと向かっていくと解釈できる。妄想的発話、ないしは独語として受け止められる発話の形式へと発展していくにはあと一歩であろう。言葉は、外界と内界の境界を超え、内界へと沈んでいく。

3) 時間の境界—混在する時間

認知症の人々の見当識障害が、時間・場所・人の順番に障害されていくことは経験的にはわかっているようである。興味深いことに子どもの認知が、人・場所・時間という順序で進んでいくのに対して、認知症の障害はその逆方向を辿る。そして、時間の認知が崩れ始める際、過去と現在が一つの場面で混合することが起こってくる。スミさんの時間の混合を紹介しよう。

骨折前のスミさんは、高度な会話ができていたと述べた。しかし、その時期にはすでに時間の見当識障害は始まっていた。スタッフが、スミさんの元を訪れ、一緒に散歩に連れ出す。S市の市街地が見渡せる窓のそばに来る。「あれがS市の市街地ですよ」とスタッフが何気なく言うと、スミさんは「ああ、あの辺りがね」と言う。すると、彼女の表情がいつもの穏やかさと少し違ってきた。「どうかしましたか？」とスタッフの声がけに、彼女は悲しそうな表情ではあるのだが、切迫した感じで「行ってみようと思うの」と話す。そして、

「どうなっているのに行ってみなければならぬの」から始める。「何がどうなっているのですか？」との問いに、どうも母親に関することだということがわかってくる。そしてスミさんは、育った場所のことや母のことを断片的に話す。「魚屋をしていたの・・・いつも自分のことは後回しにして子どもの世話ばかりで」と。そして、「私は何もしていないの・・・」「もう亡くなっているかも知れない。見に行ってみなくてはならぬの」と言う。つまり、介護が必要な状態なのに私は何もしていない、こうやって話している間にも母は亡くなっているかもしれないと涙を流しながら言っているのである。

育った場所や母がどのようにして子どもを育てたかは、時間的には70～80年前の過去のことである。また、スミさんの母が亡くなったのも20～30年前の過去の話である。そして、その母のことを話しているこの今現在、亡くなっているかもしれないから母の元へ行かなくてはという切迫感に駆られているのである。過去と現在が混在している時間の中で、スミさんは生きている。

<重度認知症の人々が作り上げている世界>

これまで述べてきたような辛い時期を超え出ていき、重度の障害を抱えるようになると、まるで影絵のような世界を認知症の人々は体験するようになる。

1) とり結んでいる人間関係—親子かそれとも姉妹か

認知症の人たちは、施設に入ると、見ず知らずの人たちと共に生活することになる。そこで彼らは、入所者どうしで、何らかの「仮の関係」を設定して暮らしていることが多い。同じ重症者でもその度合いがやや低めの人たちの一方的なものが多いが、その関係は、仲間関係や友人関係、親子関係に似た風情のものだったりする。なかでも多いのが夫婦関係の設定である。「仮の関係」とは、現実のこととは異なるフィクションとしての関係という意味である。また、その関係は一方的に設定されている。そして認知症の人たちは、その関係がフィクションであることをどこかで承知している。ここでは、「かんかい売りのサダさんと旅館のおかみミヤさん」という親子関係とも姉妹関係ともつかない関係について述べよう。

サダさんは、夫亡き後、「かんかい（「こまい」という寒流で獲れる魚の干物）」の行商で子どもを育ててきた人であり、ミヤさんは、寒村の一軒しかない旅館を長年営んできた人である。ミヤさんは陽気な人で、歌うように踊るように話し続けるため、かなり皆から迷惑がられている。また、旅館の女将さんということもあってか、脱ぎ捨てられているスリッパを集めて回るのが好きである。スリッパの持ち主たちは、盗まれたとミヤさんを非難する。これらが原因でミヤさんは時に他の患者さんの怒りを買う。そんな時にす〜と近づいてきて、ミヤさんの肩を抱きながらその場から身を引き離してくれるのがサダさんである。サダさんの病棟での日常は、かんかいの行商であちこち歩き回り、結構忙しい。患者さん相手に「かあさん、かんかい、買わないか」とおまけまでつけて執拗に売ろうとする。サダさんは、かんかい売りをしていないときは、ミヤさんの行動に目を光らせている。そうでなければ、あれほどタイミング良くミヤさんの窮地を救うような行動はとれない。サダさんとミヤさんの現実世界における接点の一つもない。生まれた町も育った場所も、そして入院する前の接触経験も全くない。

サダさんは、自分の一方的な思いだけであるが、ミヤさんを自分の子どもないしは妹という仮の関係を設定している。こういった一方通行的な関係が、もめ事や諍いなしで成立している理由は、ひとえにそれが「仮の関係」であることを彼女らが言葉で表現できない感覚的關係として承知しているからである。身体の深いところで、感じ取られている一つの関係のありようである。仮の関係ならば、遊びという暗黙の了解の領域にフィクション化しておくことができる。遊びが遊びであることの境界から一步外に踏み出した途端に、それは常に本気の領域に迷い込んでしまう。プロレスごっこは本気の投げ合いの喧嘩に発展し、ままごと遊びは自己主張のぶつかり合いになってしまう。フィクションとしての関係作りは、相互性や身体的ないしは感覚的關係と関連して、もう一つの重要な事柄を私たちに教えてくれる。それは「時間」である。サダさんがミヤさんを慈しむ関係というものが、人が生きてきた、あるいは人が生きていく上において重大な意味があるからに違いない。時間はその過程を支えている。慈しみ慈しまれるという関係は、両者の間を行き交い、剥がすことのできない感覚や感情として身体に刷り込まれてしまう。それゆえ自分が自分であることを確認させてくれる砦のごときのものである。

2) かかわること自体に供される会話—仲間との散歩

認知症の人々の会話は、形の上で3つに分類される。この3つは、「言葉の意味が残っている人たちの会話」「かかわること自体に供される会話」「関与のみに支えられた会話」の順序で抽象度が高くなっていく。つまり、だんだん了解不能の会話になっていく。そして彼らが交わしている最も多い会話の形式は「かかわること自体に供される会話」である。この会話は、内容が何であれ、楽しければいいという感じが全体を覆っている。内容、脈絡は棚上げされ、意味内容の伴わないかかわること自体が目指される。例えば次のように。

仲間関係を形成している3人が、いつものように連れ立ってトイレへと散歩する。リーダーであるトシさんが、トイレの窓の網戸に引っかかっている大きな蛾の死骸をみて、何とかそれを網戸から落とそうと息を吹きかけている。だが、なかなか蛾の死骸は網戸から剥がれない。トシさんは「ほれー、この大きい、なかなか行かない」と仲間たちに向かって言う。そこに突然、摺り足で音もなくフミさんが入ってくる。フミさんは、リーダーの「行かない」という最後の言葉を捕らえて「誰が？」と聞いてくる。仲間の一人が、この「誰が？」に応じて「化け物でないか」と言う。リーダーのトシさんは「化け物がきて、バクッと食うんでないかい」と悪乗りする。そうすると、もう一人の仲間が「そんだ、そんだ」とうなずく。「そんだ」は方言であり、通常は「そうだ、そうだ」である。このうなずく人は、出来事に対して常に同意することで仲間内の自分の立場性を保持している。また、フミさんは、長い間セールスで身を立ててきた社交的な人であり、話をまとめるのが実にうまい。このフミさんが、「化け物」と「そんだ」をつないで「化け物って損だ」とまとめる。みな納得顔で、なごやかにトイレから立ち去るのである。

これに類した会話は数多い。意味内容を不問に付すことができれば、人との関係はなごやかで楽しいものになる。会話は、他者を抜きにしては成立しない。独り言も、自分をもう一人の自分にみだてて行う会話である。一般に会話は、言葉を介しての意味の伝えあいが第一義であると考えられている。もちろん外交や医療などの領域ではとてつもなく重要である。しかし、日常的な挨拶は、特段、意味を伝えようとしているわけではない。関係

性の反映、ないしは創造である。認知症の人々の「かかわるという形」を大切にしたい会話もまたその延長にある。彼らの会話が異様さを感じさせるのは、形が肥大化しているために、違和感が露呈されてしまうだけなのである。

3) さわる行動の意味

セツさんは、物や他者、あるいは自分自身に頻繁にさわる。特にヨシオさんという明治生まれの男性が乗っている手もたれのある木の車椅子にさわるのが大好きである。彼女は、「困って・・・」とか「あれ～・・・」「わ～なに？」という限られた単語や感嘆詞しか持ち合わせていない。セツさんはいつもどおり、ヨシオさんの車椅子のスポークを1本1本でいねいに揺らしながらさわっていく。ひとしきりさわると次第に上へと進んでいき、手もたれに置かれているヨシオさんの手に行き着く。セツさんは、そのヨシオさんの指をスポークと同じようにして1本1本揺らしながらさわる。そして、とうとうヨシオさんの顔にたどり着く。忍耐強いヨシオさんも顔にさわられるとうとうしい。「こらー！」と一喝する。セツさんは驚いてその場を立ち去る。さわっていた車椅子が人間の声を出すことに驚き、困惑し、今度は自分にさわりながらデイルームをあてどなく動き回るのである。

結論から言えば、セツさんのさわる行動は、世界の再分節化としてとらえることができる。分節化とは、たとえば赤ん坊がさまざまな身の回りの物を口にして、これはスリッパこれはザル、それらを収納している場所が台所といった具合に、分けながら全体としてまとめて識別していくことである。赤ん坊はこのような分節化を行いながら自分の住む世界を認知していき、同時に、それらを認知する「自分という存在」をわかっていく。言葉の意味が失われ、周囲の物を正しく認知できなくなっていくのが認知症である。今いる場所がどこなのか、自分がいま何歳になるのか、あるいはこの人は誰なのか、家族の顔も認知できなくなっていく。そして、言葉の意味が失われるということは、思考が停滞する、ないしは思いを巡らすことができないことである。私たちは、言葉があるから考えるのである。自分を立証する言葉や、自分という実体を包み込んでいる容器としての周囲環境が見知らぬものになっていく。すべてがよそよそしさの中で生起しているのである。何かが抜け落ちている。自分を保証している何かがどんどん失われていく感じが、セツさんにはある。喪失感である。その喪失を埋めるようにしてセツさんは何かを必死で探している。デイルームという空間を常に動き回ってさわっている姿は、彼女の自分探しの旅なのである。他物にさわら、他者にさわら、自分自身にさわら行動の意味は、他ならぬ自分を再発見しようとする試みとして受け止めることができる。

おわりに

あたりまえのことではあるが、人間には一時たりとも静止している状態というものがない。また、人間という動物は他の動物同様、死を免れることができる存在ではない。だから、一刻一刻、先へと向かっていく。退行ではない。認知症の人々は、人間の原初へと向かって自らの世界を創り上げていくプロセスでリアルに生きている。